



今年も開催されます



## 全国学校飼育動物研究大会が開催されます

第18回全国学校飼育動物研究大会 主催：全国学校飼育動物研究会

日時：平成28年8月28日（日） 13時～17時（受付開始12:30～）

会場：東京大学 弥生講堂一条ホール 東京都文京・区弥生 1-1-1 東京大学農学部内

大会テーマ 「命の大切さを実感する学校飼育動物」

全国から、学校飼育を熱心にされている幼稚園、小学校、中学校、高校の先生方や獣医師、大学の研究者の方々が参加されます。大変貴重な機会ですので奮ってご参加くださいますようお願い申し上げます。（[全国学校飼育動物研究会](#)）

## 昨年の研究大会から：

昨年の研究大会では、特別公演で新美南吉研究家の保坂重政先生による、「南吉童話『ごん狐』『手袋を買いに』を中心に～動物と人間が心を通い合わせるということ～」のお話を拝聴させて頂きました。毎年、特別公演は聞き応えのある、興味深いお話が聞けますので、今年も楽しみです。

### 新見南吉は「ごん狐」や「手袋を買いに」の作者です

国語の教科書にも採用されている「ごん狐」や誰もが小さい時に読んだ記憶がある「手袋を買いに」の作者が新美南吉です。（[南吉オリジナル版「ごん狐」](#)）

動物が擬人化されて感情をもって表現されている点が物語性を高め、視点を変えて相手の感情や相手を思いやる気持ちを表現できる独特の作風で、椋鳩十やシートン動物記などの作品と大きく異なる点などのことです。

### “でんでんむしのかなしみ”は皇室でも読まれていることで話題に

“でんでんむしのかなしみ”は、美智子さま（皇后）がお子様たちの幼少期に読み聞かせした本としても有名ですが、このお話の作者も新美南吉です。

新見南吉の童話は、知らないうちに私たちの記憶の中に存在し、小さいころの感情の成長に関わっているのだと思います。子供が小さいころに、子供に読み聞かせした本を本箱の隅から引っ張り出して、改めて読んでみると、また違った奥深さを感じるものです。



「でんでんむしのかなしみ」多くの出版社から発行されています



注1) 中川美穂子先生は、学校飼育動物が子供の心の成長に与える重要性を説き、全国学校飼育動物研究会の創立と学校動物飼育活動の啓蒙にご尽力されました。その後も、学校動物飼育に関する活動を全国的に広めることに精力的に取り組み、活動は全国的なものとなりましたが、本年4月9日、永眠されました。70歳でした。

### “学校での動物飼育体験の与え方と児童の作文力”（中川美穂子先生注1）から学ぶ

＜発表の要約＞

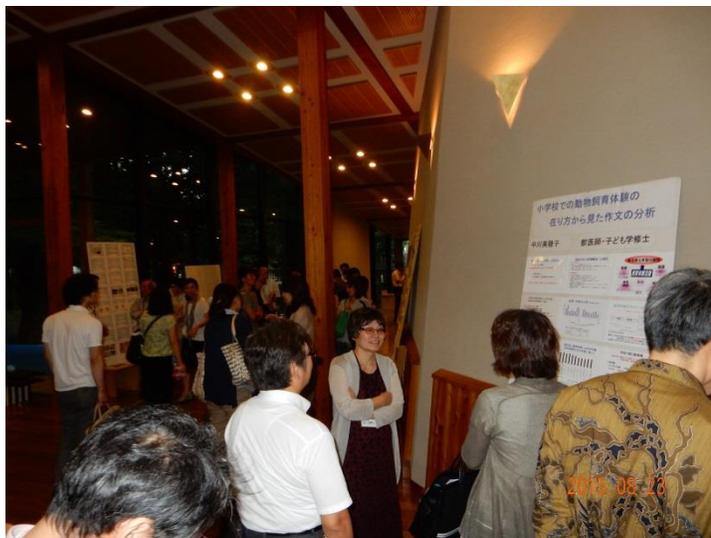
学校での動物飼育体験（特にウサギ）の与え方に関して、学年飼育と委員会飼育で比較した。その結果、学年飼育の児童は作文の文字数、作文構成力、感情表現力が有意に高いことが分かった。学年間での比較では、四年生での効果の表れが、五・六年生よりも有意に高いことが分かった。

### 四年生の学年飼育が効果的

中川先生の発表の中で、四年生の作文から、動物飼育の良い影響と思われる効果が五・六年生よりも有意にあることが分かったとのことです。四年生の学年飼育を行うことで、多くの教科に関連して、より効果的に学校動物飼育の良い効果を期待できることがうかがえる結果です。動物飼育が理科、国語、道徳、図画・工作、算数や保健体育にも関連する良い効果が期待できるようです。

### 学びの三角（言葉と体験）の考え方

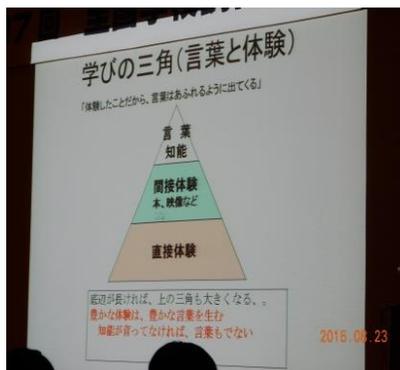
学びの三角は、直接体験が言葉や知能の発達を支えているという考え方です。間接体験（本、映像など）によっても言葉や知能は発達することが可能ですが、より多くの実体験で裏打ちされることで、間接体験が生き、より確かな、よりバリエーションの多い感情や表現を身に着けるとされています。実際のところ、ふれあい教室などで一年生の子供に「心臓って知ってる？」と聞いてみると、ほとんどの子供は知っていると言います。しかしながら、「どこにある？」とか「どんな風に聞こえる？」と聞いてみると、おかしな答えが返ってくることも良く経験するところです。本や情報から得た心臓の知識と、それが自分にもあることが合致していないことの表れだと感じています。底辺が長いほど（実体験が多いほど）学びの三角形は大きくなります。出来るだけ多くの実体験を持たせることが、その後の学習効果にも大きく影響することは、たやすく理解できることです。



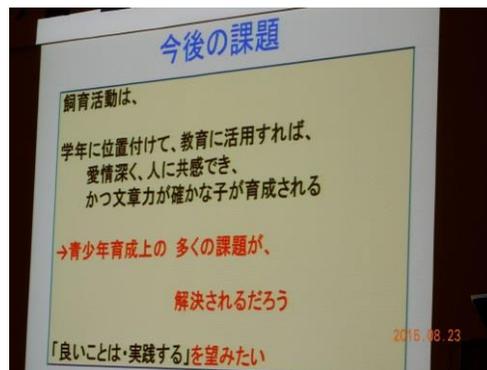
本年、4月9日に故人となられた中川美穂子先生（中央）を囲んでの昨年の研究大会風景



学年間の効果の比較



学びの三角の模式図



今後の課題

### 今後の課題にこめられた、中川美穂子先生のメッセージ

学校動物飼育が子供に与える良い影響の根拠が示されている中、なかなかそれが実践されない現状です。学校での動物飼育が減少傾向で（「動物飼育が子どもの心情に与えるもの」小椋郁夫・名古屋女子大学 2015年研究大会発表）、子供にとって良い経験ができる機会が減ってきている傾向を憂慮する現状です。

中川先生のお話では、動物飼育に携わった子供は、お世話の仕方だけでなく、熱心に、大切に動物をお世話する気持ちを次の学年に引き継ぎ、そうすることで命の重みや慈しみの気持ちがバトンタッチされると説明されていました。実際、生き物を引き継ぐことはそれほどの重さを持っているものと感じます。子供のみならず、学校動物飼育に関わる大人達でも、学校動物飼育に携わることの意義、重要性を引き継ぎ、熱い思いを絶やさずに継続することが必要だと感じます。

我々も、中川先生の熱い思いを継承していきたいと思います。

